

talk! talk! talk! 俳優・賀集利樹さん



俳優
賀集利樹さん

2001年からテレビ放映された『仮面ライダーアギト』。賀集利樹さんが演じた魅力溢れる新世代のヒーロー“アギト”は子供たちはもちろん、その母親たちをも熱狂させた。
「今、演じることが一番楽しい」と熱っぽく語る賀集さん。デビューのきっかけからアギトの撮影秘話とその思い、そして忙しい合間をぬって訪れたという屋久島での思い出話まで、屋久島で撮影したという写真を拝見しながら様々なお話を伺った。

プロフィール

かしゅう・としぎ。1979年1月16日、兵庫県尼崎市生まれ。1999年より、雑誌『Fine』の専属モデルとして活躍。2001年1月から2002年1月まで放映されていたテレビ朝日系連続ドラマ『仮面ライダーアギト』の主役・津上翔一役で俳優デビュー。子供からその親に至るまで、幅広い世代からの支持を受け注目を集める。その後、『はぐれ刑事純情派』（テレビ朝日系）、『お見合い放浪記』（NHK）に出演。またドラマだけでなく、バラエティー番組などにも積極的に出演し、現在は『体育王国』（TBS系）、『深夜戦隊ガリンベロ』（フジテレビ系）にレギュラー出演中だ。
今後、2003年1月9日スタートのTBS系連続ドラマ『年下の男』に出演。稲森いずみ演じるヒロインに恋する“年下の男”役で、人気脚本家・内館牧子さんのドラマに挑戦する。

現代のヒーロー像を鮮やかに演じた『仮面ライダーアギト』 「はじめは“僕がやるんですか？”っていう感じでした」

俳優になる前、モデルをしていたそうですね。

はい、ファッション雑誌のモデルを1年ぐらいやっていました。実家から月に2、3回上京して撮影をして、また実家に戻って。僕はもともと根が目立ちたがりやなんですよ。雑誌のモデルをやりはじめると、途端に周りからすごい反響があったのですが、それをヒシヒシと感じながらモデルを続けているうちに欲が出たというか、モデルだけじゃもの足りないというか……。もっと多くの人に見られたいなと思い始めたんです。そんな時に、今の事務所俳優になってみないかと声をかけて頂いて、東京に出てくることになったんです。

もともと俳優という職業に興味はあったのですか？

小さいときからの夢という感じではないんですが、モデル時代に芽生えた向上心が、声をかけられたときに刺激されたのか、自然な流れで「よし、俳優をやってみよう、やってみたいな」と思えたんです。

そして上京後、『仮面ライダーアギト』のオーディションを受けることになった。

はい。上京して約2ヶ月後のことです。実は、オーディションの話をいただいたときは、正直、戸惑ってしまいました。僕の世代にとっては仮面ライダーは外見のイメージを知っているぐらいで、いったいどんなヒーローだったのかよく知らないんですよ。きっと当時の子供たちにとってはすごく強く、カッコよくて、雲の上の存在のような、まさに理想のヒーロー像だったのではないかと思います。だから、自分の中では「僕がああヒーローをやるんですか？」っていう感じでしたね。

ところが実際に、そのヒーローを演じることになったわけですよね。

オーディションに合格してすぐ、打ち合わせがありました。そこで渡された『仮面ライダーアギト』の概要を書いた企画書を読んだら、全然違うんですよ、それまで抱いていた仮面ライダーのイメージとは。ひと言でいうと、“仮面ライダーになっちゃいました”っていう役だったんです。

気づいたら変身できるようになっていたという設定でしたね。

そう、記憶喪失という設定で。おまけに居候の身で、家事手伝いをしながらのんびり暮しているんです（笑）。とにかく僕の描いていた仮面ライダー、ヒーロー像とはほど遠いものでした。雲の上の存在ではなく、隣近所にいるお兄ちゃんっていう存在でした。でもそのイメージのギャップが逆に、ちょっと面白そうだなと思いました。そして実際に演じているうちに、誰よりも自分が仮面ライダーにのめり込んでいってしまったのです。

実際、以前の仮面ライダーとアギトは全然違うものでした。だからイメージを引きずらないように、あえて以前の仮面ライダーは見ませんでした。当時とは時代背景もかなり違いますから、だったら僕は現代のヒーロー像を演じようと思いました。

『仮面ライダーアギト』は子供たちだけでなく、そのお母さんたちにも人気でしたね。それはやはり新しいヒーロー像が受け入れられたということなのでしょうかね？

子供たちは、どちらかというと変身するカッコよさとか、アクションに興味があったと思うんですよ。でも、一緒に見ていたお母さんたちにもファンになってもらえたというのは、もしかするとそういったところに興味を持って見てもらえたのかもしれないかと思っただけなんですけど（笑）。

賀集さん演じる翔一は、やさしくて朗らかな青年でしたね。

それに、とても前向きな人でしたね。記憶喪失だっていうだけでも、普通の人とはあんなに明るくはなれないと思います。でも翔一は今がよければいいというか、常に今を見つめている人でした。

賀集さん自身は、翔一の性格に何か通じるものはありましたか？

僕も翔一と同じように、前向きな人間だと思います。今頑張ることができればそれでいいし、過去は引きずらないし振り返らない。過去の失敗を引きずったりする人もいます。でも、過去の失敗があるからこそ今の自分があると思えば、失敗だっていいことだと思うんです。失敗を恐れる必要はないですよ。そういうことを積み重ねていって、人間は成長してゆくものだと思いますから。



1年間という長期間の放送でしたからいろいろな経験をされたと思うのですが、特に撮影で大変だった思い出というのはありますか？

やはり撮影スケジュールがハードだったことですね。1年間、ほとんど毎日撮影がありましたから。アクションシーンなどは時間をかけて撮影するので、それがあるとどうしても時間がかかるんです。毎週放送がありますから、撮りだめができる状況でもありませんでした。

賀集さんもアクションシーンにチャレンジされたんですか？

それが、僕はアクションシーンがあまりなかったんです。でもアクションシーンのためにと思って、撮影に入る前に、テレビ用のアクションを教えてくださいの“アクション道場”に1ヶ月ぐらい通いました。構えや受け身、蹴り方、そういう基本的なところから教えてくれるのですが、それがけっこうキツかったんですよ.....あ、今思い出してみると、そこに通っている時が一番大変だったかもしれない(笑)。でもあれだけ一生懸命アクションを学んだおかげで、どんなシーンでもこなせるという自信はつきましたよ。

撮影に入る前に、バイクの免許も取りに行かれたそうですね。それはやはり撮影のためですか？

仮面“ライダー”ですからね(笑)。バイクのイメージが強いですよね。実際、変身後にバイクに乗るのはスタントマンの方なので、僕が運転できなければいけないということはないのです。でも変身前に、バイクにまたがって発進するシーンなどは、実際に乗れたほうがスムーズに撮影をこなすことができますし、表情や身のこなしがよりリアルなものになると思うんですよ。

2002年の1月に放送が終了してから1年ほどたちましたが、『仮面ライダーアギト』に出演したということについて、今日のように感じていますか？

そうですね.....アギトはデビュー作ですから、僕にとって演技をすること自体が初めてでしたし、それなのに自分が主役でしたから.....とにかくいろいろなことを学んだ1年間だったと思います。出演後、反響がすごく大きくて、自分を取り巻く状況はもちろん、内面や考え方も以前とは大きく変わりました。自分自身、演技をすることにすごく興味を持ちましたし、1年間アギトをやり遂げたということが、今になっていい自信になっていると思います。撮影しているときは、すごく長いなって感じていたのですが、終ってみるとアツという間でした。それだけ、夢中で突っ走っていた1年だったのだと思います。



数千年を生きる縄文杉から受けたパワー 「大きさだけでも圧倒されてしまいます」

先日、忙しいお仕事の合間をぬって屋久島へ行かれたそうですね。今回はその時のお写真もお持ちいただきました。

屋久島は世界遺産に登録されている島ですし、以前から行きたいと思っていたのです。それで、意を決してマネージャーと一緒に行ってきたんです。

屋久杉(※注1)は見に行かれたのですか？

はい、片道4時間ぐらいかけて、屋久杉の中でも一番大きいという縄文杉を見に行きました。以前トロッコが通っていたという線路跡の道を2時間ぐらい歩いて、そこから山道を更に2時間ぐらい登ったところにあるのです。ロープがついている急な岩場や、一歩間違えると崖に落ちそうな険しい場所もありました。岩場を登るのは楽しかったのですが、山道はひたすら登るだけですから、とても大変でした。

片道4時間!縄文杉を見るまでに、大変な道のりがあるんですね。

そうですね。その日はたまたま晴れていてよかったのですが、雨が降っていたらたどり着けなかったかもしれません。山道に入ってから縄文杉に着くまでの間には、名前の付いた屋久杉がいくつかあるんですよ。弥生杉とか大王杉とか。この写真に写っているのは、ウィルソン株という古株で、アメリカのウィルソンという博士が発見したものだそうです。株の中は空洞になっているんですよ。

ウィルソン株は確か、その空洞に入れるのですよね？

そうですね。中に入ると水が流れているんです。そして、上を見ると天井が抜けていて空が見える。僕はこのウィルソン株が一番気に入りました。たまたまいい景色とか、その周りの景色とか、すごくいい雰囲気なんです。中に神棚もあったので、「おじゃまします」という気持ちを込めて、しっかり手を合わせてきました。

そして、こちらの写真がやっとの思いでたどり着いたという縄文杉ですね。

はい。昔は縄文杉に直接触れたりすることができたらしいのですが、保護のために、今は少し手前にある展望台のようなところから眺めることしかできないんです。でも、眺めているだけでも何か神秘的なパワーを感じるんですよ。樹齢7200年と言われている杉ですから、根や幹の大きさだけでも圧倒されてしまいます。

縄文杉のパワーももらったようだし、この旅でかなりリフレッシュされたのではないですか？

そうですね。森林浴もできたり、そのほかに滝を見にいったりもしましたからね。滝の音や川の流れる音って普段はあまり聞かないですから、それだけでもすごく安らぎました。

※ 注1 屋久杉=屋久島の標高500mを超える山地に自生している杉のこと。なかでも樹齢千年以上の高齢の杉のことを通称『屋久杉』、それ以下の若い杉を『小杉』と呼んでいる。また、屋久杉の中で確認される最も大きい杉のことを『縄文杉』と呼ぶ。一説では、推定樹齢7300年、世界最古の植物とも言われるほどの古木である。縄文杉以外にも、巨木や形態に特徴のある杉には名前がつけられ、有名になっている。



何十年の間、屋久杉を島のふもとまで運搬したというトロッコ道。今はすでに使われていません。



これが推定樹齢2000年のウィルソン株。世界遺産に指定されている屋久杉たちはどれも生命の息吹を感じました。



これが縄文杉。何千年ものあいだ人間の進化を見守ってきたんですね。

何回も、何回も見たい子供のころのアルバム 写真は『思い出を蘇らせてくれるもの』

今回の旅行ではどのくらい写真を撮られたのですか？

旅行に行くときすごく写真を撮りたくなるんです。だから今回もいっぱい撮ってやろうと思って意気込んで行ったんですけど、歩くのに必死で意外に撮れていなかったんですね。とにかく縄文杉にたどり着かなければと思って山を登っていたので、カメラを構えている余裕がなかったのかもかもしれません。

では、なんとか所要所はカメラにおさめておこうという感じですね。

そうですね。でも写真って本当に難しいなと今回思いましたね。縄文杉を見に出発したのが朝の6時ぐらいだったので、まだ外は暗いんです。昼間になっても森の中は光りがなかなか届かないですから、常に暗い状態なんです。それで写真を撮ってみてもなかなかうまく撮れなかったんです。帰ってから写真を見てみると、なんか違うなって。そのとき見た迫力をそのまま残すわけには、なかなかいかないものなのだなあとつくづく思いました。

そのような撮影状況では思い通りの写真を撮るのはなかなか難しいかもしれませんが、次に行ってみたい場所がありますか？

ニューヨークです！ こども、もうずっと行きたいと思っている場所なんです。マンハッタンをこの目で見て、あの街のパワーを肌で感じたいなと思って。ウッディ・アレンの『マンハッタン』というモノクロ映画を見たのですが、そこに写るマンハッタンの映像が、ものすごくカッコいいんですよ。ひとつひとつが絵になっていて、モノクロの映像が新鮮だった。それを見てから余計に行きたくなくなってしまった場所なんです。

では、実現したら、今度こそたくさん写真を撮ってきてくださいね。旅行以外ではどのような時に写真を撮られるのですか？

最近はずっと時間がないのですが、昔は友達同士で撮りあったりしていましたよ。あと、面白いものがあればなんでも撮っていましたね。写真ってその瞬間、瞬間を記録するものだから面白いと思うんですよ。その瞬間がそのまま思い出に残るじゃないですか、それがすごくいいなと思いますね。

では、よく写真を見返したりするのですか？

しますよ。写真を見るのはすごく好きです。親が僕の生まれた時から小学校に入るぐらいまでの写真をまとめてアルバムを作ってくれていたんです。僕のアルバムは3冊ぐらいあったのですが、小学校から中学校に上がるぐらいの時、そのアルバムを何回も、何回も見ていた覚えがあるんです。もうほとんど記憶にないことがたくさん載っているのが楽しかったんだと思うんです。

確かに自分の幼い時のアルバムは面白いですよ。親にその写真についての思い出を聞きながら見たりして。

僕も「ここはどこなの？」ってよく聞いていましたね。親に「写真の下に書いてあるじゃない」って言われて、ああ、本当だってあらためて確認したりして。でも、そうやって見ていると、生まれた時はこんな所に住んでいたんだとか、こんな所に旅行にいったんだとか、だんだん忘れていたことを思い出したりするんですよ。記憶が蘇ってくるんですよ。そう考えると写真って本当にすごいものだなと思います。



宿泊した宿から見た海。
海を見ながらの食事のおいしかったこと！



屋久島には大中小、合わせて何百もの滝があるんですよ。



屋久島は本当に神々しい島だと感じました。

そう考えると写真って本当にすごいものだなと思います。

演じることが今一番楽しくて、一番面白い 「俳優はやりがいのある、魅力ある仕事です」

賀集さんの今後の目標はなんですか？

うーん.....そうですね、いろいろな役柄を演じ分けられるような、役者としての引き出しをたくさん持った俳優になりたいです。役柄によって役者個人のイメージもガラッと変わってしまうぐらい役になりきって演じたいです。だから今は、いろいろな役に挑戦していきたいと思っています。たとえば、今まではどちらかというと好青年というか、いい人の役だったので、今度はちょっと悪いイメージのある役がいいかな？ 「これが賀集の本性なんだよ」と思われるぐらいになりたいですね。様々な役柄を演じるたびに、みなさんが自分に抱いているイメージというのをいい意味で裏切って、壊しながらやっていけたらいいですね。

その根底には賀集利樹という俳優の個性がしっかりある。

ええ、そうなるためにも、もっと中身を鍛えていかなければいけないと思います。自分の思ったことや考えたこと、人生経験みたいなものが役づくりには重要なことだと思いますから。もっといろいろな経験をしたいですね。屋久島に行ったこともそうですが、今まで自分のやったことのないことをして、行ったことのない場所に行って、多くの人に出会って。そういうことすべてが役づくり生きてくると思うんですよ。もちろん仕事をすることも勉強ですから、だからやっぱり今はどんなことにも挑戦していきたいです。

たとえば来年どうしたいとか、再来年にはこうありたいといった具体的な計画はあるのですか？

いえ、来年はこうしようとか、ああしようとか、具体的な目標は持たないようにしているんですよ。目標を作ってしまうとそれ以上先へいけないような気がしてしまって。今年はこのままで決めて、本当はもっと上を目指すことができたかもしれないのにそこで満足してしまう、といった風に。俳優という仕事自体、終わりのないものだと思います。いろいろな役をやっても満足できないというか、永遠に追求することが出てくると思うんです。だからこそやりがいがある、魅力ある仕事です。

お話をお伺いしていると、俳優という仕事に対する賀集さんの思いが強く伝わってきます。今、俳優になられたことを心から楽しんでいらっしゃるように感じました。



(笑) そうですね。演じるということが今一番楽しくて、一番面白いと思っています。うん、一番好きですね。

では最後に、ニコイメーキングを見ている方に向けて、メッセージをお願いいたします。

これからもずっと俳優としてやっていきたいと思っています。その中で、いろいろな賀集利樹をみなさんにお見せしていきたいと考えていますので、ぜひ応援してください！

ありがとうございました。これからのご活躍を楽しみにしています！

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。